

【パネル2 12月7日 13:00-14:55 A会場 1F大講義室】

上座仏教社会における高齢者のウェルビーイングと宗教実践
功德と自利利他の概念

速水 洋子
(京都大学・連携教員)

アジアの上座仏教社会では、進度はそれぞれに異なるものの高齢化が進行している。「豊かになる前に老いる」と言われ急激な高齢化を経験しているタイの例では、国の制度による支援が十分ではない一方で、少子化や移動労働が増加するなかでもはや家族ケアに頼ることは難しくなっている。そうした中で宗教のもとで組織されるケアは一定の役割を果たし、また様々な場面でのケアの実践はしばしば宗教的な意味付けをもって語られる。

高齢期は人生の終わりに向けて積徳に専心する時期とされる一方で、高齢者自身が積徳行為や功德の回向の対象となる上に、「親世代」として子世代による報恩の対象でもあり、多重の意味で功德の実践と不可分である。積徳行為の中でも布施行では、布施主が受け手に施物を施し功德を得るという自利利他の原理がはたらく。上座仏教では、徳田である寺院や僧侶に対する布施こそ布施者に最も徳をもたらす積徳行為とされる。そうしたことから寺院に集積する財や人の流れを用いて寺院が医療やリハビリ、養護施設などを備えて、直接高齢者や病者にケアなどの善行を施す事例も近年様々な形で見られる。一方日常的に、従来から俗人や動物に対する善行も積徳として語られてきた。高齢者や病者のケアに関わる人々は、身内であれボランティアであれ、あるいは高齢者施設などで雇用されたスタッフですら、そうした行為を積徳として語り、また、高齢者施設に食事の寄附をすることをもって積徳とする俗人の姿がある。金銭や飲食物などの施物のみならず、ケアや放鳥・放魚のように生に関わる善行もまた施しとして実施される。

本パネルでは、高齢者を対象とした施しが施主自身の積徳という自利利他の実践となることが、いかに宗教の枠組の内外で実践され組織化されてきたか。またそれは高齢化する社会のケアにおいてどのように位置づけられ補い交錯するのかを明らかにする。片岡は、北タイにおける中国系善堂と上座仏教寺院の調査から、高齢者ケアを通じて僧侶が布施を受けてこの再分配の結節点となる積徳の在り方と、宗教の枠組みを超えた功德の実践の相互乗り入れを論じる。小林は、カンボジア農村における困窮した病者に寄付をする俗人による仏教儀礼に端を発して、より広く功德の行いとその語りについて考察する。中村は、スリランカの高齢者施設において寄付やケアなど功德の実践とされる行為がその場に居合わせるものたちにとって何を意味し、そこに何が生み出されるのかを考察する。

高齢者ケアをめぐる、積徳や善行を通じて宗教と非宗教、宗教間、あるいは聖と俗の境界の揺らぎを検証し、功德をめぐる善行としてのケアがどのような高齢化する社会を形作るのかを論じる。

【パネル2 12月7日 13:00-14:55 A会場 1F大講義室】

高齢者ケアを取り巻く宗教システム タイ国チェンライ県の事例を中心に

片岡 樹
(京都大学)

本報告では、タイ国において高齢者を含む弱者ケアを可能ならしめている宗教的背景を、報告者がこれまでフィールドとしてきたチェンライ県のいくつかの施設を事例にとりあげ検討するものである。

東南アジアにおいては、再分配における国家の役割の低さと、世帯や親族集団を越えた共同体の相対的な弱さが指摘されてきた。その間隙を埋めるものとして注目を集めてきたのが宗教の公共的機能である。ここで特に参考になるのが、小林知がカンボジアの事例から報告するサンガハという仏教儀礼である。そこでは、従来の積徳儀礼とは正反対に、在家の弱者を受け手とし、僧侶を与え手に含む形式となっており、小林はそこに俗人主導による仏教の公共空間の可能性を見出している。

小林が見出したサンガハ・モデルは、タイ国における宗教を介した再分配を考察するうえで大きなヒントを与える。ただし現代タイ国でこの問題に取り組む場合、もうひとつの変数を考慮する必要がある。それは、中国系移民たちのタイ社会への同化と、それがもたらすタイ主流社会への中国文化の浸潤という因子である。

上座部仏教サンガを在家者主体で補完する存在の典型が善堂であり、実際に善堂による救貧活動はしばしば仏教サンガへの寄付とそこから在家者への下げ渡しという形式をとっている。チェンライ県でも徳教会ネットワークに参加する潮州系の大手善堂がそうした役割を担っているが、そうした善堂モデルとでもいべき再分配活動が、タイ仏教の内部でも生じている。

本報告ではそうした事例を二つ紹介するが、そのひとつはプロムウィハーン財団である。これはチェンライ県メーサーイ郡のプロムウィハーン寺の初代住職が、交通事故者や病人を助けるべく設立したものである。レスキュー隊を擁し救急車を運営するほか、寄付金を集めて貧困層に毛布や米を配り、また施餓鬼を行うなど、中国系善堂の手法をそのまま取り入れた活動を行っている。

ふたつめの事例は同県ムアン郡のフオイ・プラー・カン寺である。同寺はタイ・サンガに属する上座部仏教寺院でありながら観音を本尊とし、占いを通じて国内外のビジネス界にクライアントを獲得して、その寄付を原資に慈善活動を維持している。境内には慈善病院、孤児院、養老院が併設されており、終末期医療から施棺、および墓地の提供までを行っている。

以上の事例から本報告では、出家主義・解脱至上主義から在家者の救済や仏教の社会参加へと仏教の目標が拡大していく中で、タイ仏教と中国的宗教との相互乗り入れを通じた大乘仏教や中国善堂モデルの浸潤が、特に弱者ケアの分野で大きな役割を果たしていることを明らかにする。

【パネル2 12月7日 13:00-14:55 A会場 1F大講義室】

「サンガハ」再考
功德論の視点から

小林 知
(京都大学)

発表者はかつて、カンボジア農村で観察した「サンガハ」と呼ばれる仏教儀礼について考察を提出した(小林 2019、Kobayashi 2020)。「サンガハ」とは、重病人を抱えて経済的に困窮した村落世帯に対して、村長と近隣の住民らが発起して行う仏教儀礼である。そして、参加者が持ち寄った寄進(金銭や物品)が僧侶でなく、対象世帯に届けられる点に大きな特徴があった。上座仏教は、出家者(僧侶)と在家者の間の断絶を強調する。そして、上座仏教の在家者の実践を考える上で重要なのが、功德の概念と、それを多く積むことで幸福が得られるという信念である。さらに、積徳行の中心には三宝(ブッダ・ダンマ・サンガ)があり、その保持と振興に寄与する行為こそが功德をもたらすという説明がなされる。「サンガハ」では、しかし、寄進の受け手が出家者でなく俗人である。この点でそれは、上座仏教の一般的な功德論の枠組みを超えており、カンボジアの仏教徒の功德観の柔軟性を示す興味深い事例と考えられた。

しかし、発表者自身の1990年代末以降のカンボジアでの調査経験を改めて検討すると、仏教儀礼を通して在家者同士の助け合いが促されていた事例が他にもあった。また、隣国タイに眼を向ければ、高齢者ケアを含む社会的な活動が広く積徳の行為だと語られる場面がある。また、カンボジアでもタイでも、葬儀組合など、仏教徒の実践をベースとした互助の組織化がみられる。つまり、三宝を離れた「善行」が広く積徳行とみなされる状況が、近年の東南アジア上座仏教徒社会では一般化している。

本報告では、「サンガハ」を事例に、カンボジアでは1990年代、タイでは1970年代より始まった開発という社会経験が地域社会の人々の暮らしにもたらした変化を念頭に、以上のような積徳行をめぐる近年の状況が照らしだす宗教文化の変容の意義を、複数の視点から論じてみたい。「善行」の位置づけが変化し、積徳行の対象が拡大した。それは、目の前の困窮者を助けたいという現代の人々から大きな賛同を得ている。しかし、互助を目指す近年の実践には多くの場合、言葉による「説明」が付随するように思える。一方で、上座仏教は古来、パーリ語聖典を礎とする「行い」によってその教えを継承してきた。やり方や意義に関して言葉による定型的な説明がないことを特徴とする「サンガハ」には、この「行い」という上座仏教の特徴が息づいている。

・小林 知. 2019. 「サンガハの可能性と限界 —カンボジア農村における萌芽的なケアに関する一考察」 『東南アジアにおけるケアの潜在力：生のつながりの実践』 速水洋子編. 京都大学学術出版会. 503-538頁.

・Kobayashi Satoru. 2020. "Cultural innovation in the face of modernization: A study of emerging community-based care in rural Cambodia." *South East Asia Research* 28(3): 231-247.

【パネル2 12月7日 13:00-14:55 A会場 1F大講義室】

スリランカの高齢者施設における功德のあらわれ
自利・利他の仮定法的世界を生きる

中村 沙絵
(東京大学)

本発表は、スリランカの高齢者施設における食事の布施 (*dāna*) や身の回りの世話 (*sēva*) などがなされる場で起きていることを、その現場に居合わせる者たちにとっての功德のあらわれかたに着目して描出する試みである。その場で起きていることを「自利・利他の仮定法的現実を生きる」経験として理解することは可能かを問い、またそのように理解することの意義について検討する。

スリランカには高齢者のための居住施設が都市部を中心に各地に存在する。いわゆる身寄りのない者が暮らす施設が大半を占める。その運営を支えてきたのが、近隣の有志の人々がもちよる食事や物品の布施 (*dāna*) である。施設の運営を支える日々の食事や生活必需品の布施は追悼供養を兼ねる。施主は誕生日や両親の命日などに施設を訪れ、布施で生じた功德を故人に回向する。高齢者施設で暮らす者たちは、ほぼ毎日のように、こうして訪れる施主と直に交流する。食べ物は施主から高齢者へ流れ、功德は高齢者が執りおこなう功德回向の儀礼を通じて施主やその故人へと流れる。寄付という弱者への一方的な贈与は、上座仏教的な概念や実践を媒介することで、不意に相互性をおびる。

ただ、この相互性を「高齢者 [/ 施主] は食事・物品の受け手 [/ 与え手] であり、同時に功德の与え手 [/ 受け手] でもある」などと、互酬性の図式で平たく解釈してしまうと、この場で起きていることを捉えそこねるだろう。高齢者や施主、スタッフの語りやふるまいを功德のあらわれに注意を払って見直すならば、別の光景がみえてくる。

功德は、調理や配膳といった行為の只中で、あるいは儀礼の準備で花を摘むなかで、蠟燭についた火のように、浮かんでは消えるよろこびの感覚として生まれうる。そしてそれは、共に居合わせる儀礼の只中で (その場に居るだけで) 蠟燭の火がひろがるようにして分かち合われうる。食後、入居者が受けとった施物を入居者棟の裏などで猫や犬や鳥などに分け与えると、そこにもまた、よろこび≡功德が生まれ漂う空間が、ぽっと現れる。

この空間は、共有された仮定法的世界とも呼べそうだ。そこでは高齢者も施主も動物も、心もとなくままならないサンサーラ (輪廻転生) の旅路に行くという意味で不完全な存在 (パーリ語で功德の対義語を指す罪 (*pāpa*) は本来こうした不完全な状態を指す) として存在する。そうした不完全な存在だからこそ、ある対象に向かい利己心や欲望を満たすのではなく、ただ自己を差し出すような行為の只中でよろこび≡功德を感受することが自利となる (確からしく価値あるもの感じられる)。利他は、それを通じて自利がなされるどころの抛り所といえようか。心の休まらない施設の暮らしにおいて、そう「かもしれない」世界に他者と共に参与する時間は、入居者にとっても重要な意味をもったはずだ。それは、相手が何を欲しているかを十全に理解し、これを満たすことに重きを置き、その達成の如何で自分を評価するような態度が抜けきれなかった当時の私にとっても、やはり重要な意味をもつものだった。